隅田川物の中の『都鳥妻恋笛』

――其磧時代物小考――

佐伯孝弘

一、はじめに
二、先行作品の利用
三、笛、および賤民
四、其磧の構成法
五、おわりに

要旨

江島其磧の晩年の時代物浮世草子『都鳥妻恋笛』は隅田川物に属し、後に読本仕立てで再版されるが、従来の評価は必ずしも芳しくない。

本作と先行隅田川物の諸作を細かく比較すると、其磧が従来指摘のなかった上方歌舞伎の隅田川物を含め、実に多くの先行作から趣向を採りながら、演劇の運命悲劇的な深刻さ・凄惨さを薄める形に改変して利用していることが分かる。また、色事によって事態を展開させようとする、其磧なりの作意を窺うことができる。

全体を繋ぐ道具立としての笛のモチーフは、隅田川伝承と笛の浅からぬ関係を踏まえ、取り込まれた可能性がある。

精力的に材料を博捜取材しつつ、小道具や一貫した作意を用い複雑な筋立てを破綻無く構成する、其磧の手腕は評価して良い。そうした構成法は、怪異性の取り込みと共に、読本に通じる特徴と言える。

一　はじめに

謡曲『隅田川』を濫觴とする〈隅田川物〉の文芸は、近世文学とりわけ演劇・芸能において大いに流行した。[1] 八文字屋刊行の時代物浮世草子『都鳥妻恋笛』（享保十九年刊）は、この〈隅田川物〉の系譜に属する、江島其磧晩年の作である。

吉田少将と班女（花子）との契りを描く謡曲『班女』と、人買いに拐かされ隅田川辺で横死した梅若丸を母が探す悲劇の謡曲『隅田川』は本来無関係だったとされるが、登場人物「吉田少将」の名の一致などから、夙に続き物と捉えられるようになる。梅若丸に松若丸を加え二人の兄弟とし、松若丸が天狗にさらわれる趣向やお家騒動の筋立てを構え、長編化して行く。以上の〈隅田川物〉の基本型は、近世初期の説経浄瑠璃や仮名草子・古浄瑠璃などの段階で出来上がっていた。其磧も、その定型に則って『都鳥妻恋笛』を書いている。

また『都鳥妻恋笛』は、上田秋成の『雨月物語』「青頭巾」の典拠となった[2]ことでも知られている。

二　先行作品の利用

『都鳥妻恋笛』は、従来主として近松門左衛門作の浄瑠璃『双生（ふたご）隅田川』（享保五年、大坂竹本座）に拠りつつ想を構えたとされて来た。[3] 長谷川強氏も『双生隅田川』を主としつつ、他に古浄瑠璃『隅田川』や御伽草子『秋夜長物語（あきのよのながものがたり）』を典拠として挙げておられる。[4] これに対して最近、木越治氏は必ずしも『双生隅田川』に拠るところが大きいとは言いきれないとし、隅田川物の歌舞伎『出世隅田川』（元禄十四年、江戸中村座、絵入狂言本が残る）、更には怪異小説の『伽婢子』（浅井了意作、寛文六年刊）四の二・八の四と『金玉ねぢぶくさ』（章花堂作、元禄十七年刊）一の二を、構想上の典拠として指摘された。[5]

其磧は、既に指摘のあるもの以外にも隅田川物に関わる諸作を広く集め、それらに直接拠ったり発想の契機を得たりして、本作『都鳥妻恋笛』を書いたと思われる。以下、やや煩雑になるが、ストーリーを追いながら先行作との具体的な関係を考察して行きたい。

まず主な登場人物を示す。（縦線は親子、横単線は兄弟、横二重線は夫婦関係）

上総大輔員貫（吹笛上人・天狗坊）
常陸大掾百連 ―― 百丸
妙薫院 ―― 吉田少将行房 ═══ 松若丸（吉田中将有房）
梅若丸
百姓弥三大夫 ―― 花子（班女・野上）
吉田家家臣 山田三郎道継 ―― しのぶ（山路）
粟津六郎
松井源五定景
浪人 七浦専左衛門
福原木工頭 ―― 三隅（福原）大学貞俊 ═══ 小春
花子の贋実父
（贋穢多の九之助・弥三大夫の隣家の百姓）
人買い 猿轡の門兵衛

主要登場人物のうち、「吉田少将」「班女[6]・花子」「梅若丸」「松若丸」は多くの隅田川物に共通する名だが、「吉田少将行房」の「行房」の名とお家乗っ取りを計る敵役「常陸大掾百連」の名は、近松の『双生隅田川』に拠る。但し、善方悪方に別れ争う家臣達の「山田三郎」「粟津六郎」「松井源五定景」という名は、『双生隅田川』には用いられておらず、説経浄瑠璃『すみだ川』・古浄瑠璃『隅田川』（加賀掾・角太夫正本）・仮名草子『角田川物語』（明暦二年刊）等に踏襲される名を用いたものである。

（一の一）吉田少将が奥州下向の途中、美濃国野上の宿の遊女花子（班女）と馴染み、扇を取り交わして別れる。奥州赴任の五年の間、毎夜花子が吉田少将の寝所へ夜伽に現れる。任が果て帰京の途中少将が野上に寄ると、花子は五年の間ずっと少将を慕って魂の抜けたようになり伏していた由。少将と再会した途端、花子は正気に戻る。花子も毎夜少将と同じ夢を見て、夢路に少将の許へ通っていたのだった。少将は花子を都へ伴い、「班女」と名を改めさせ寵愛する。少将の母が、遊女は子を生まぬからとの理由で、班女を吉田家へ入れることに反対。班女は北野天満宮に願をかけ満願の日に懐胎し、松若丸を生む。晴れて班女は少将の正妻となり、次男梅若丸も生まれる。

吉田少将と遊女班女が馴染んだが扇を取り交わして別れ、後に再会を果たし夫婦になるというのは、周知の如く謡曲『班女』を嚆矢とし、早くに隅田川物に取り込まれたもの。隅田川物の骨組みに当たる筋立て。夫婦が設ける子を梅若と松若の二子とするのは、仮名草子『角田川物語』が最初とされているが、室町時代小説『花子物語[7]』に既に見える。

梅若丸を北野天神の申し子とするのは先行の隅田川物にほとんど見られないものの、『花子物語』とは一致する。

吉田少将と班女が同じ夢を見て逢瀬を重ねた末に現実に再会を果たすという、〈夢中の逢瀬と再会〉とでも言うべき趣向は、木越氏の指摘の通り『伽婢子』四の二に拠る。怪異小説『伽婢子』は隅田川物の系列に属する作ではない。にも拘わらず、其磧はどうしてこれを素材として採ったのだろうか。一つには、別に美少年の幽霊が笛を吹きつつ登場する場面を『伽婢子』から採っているので、そちらから『伽婢子』の利用を思い立ち、読み返していてこの夢路の趣向に行き当たったのかもしれない。その場合にも、ではなぜ夢路の趣向なのかという疑問は残る。

ここに、御伽草子『秋夜長物語』が影響した可能性もあるのではないかと思う。『秋夜長物語』は桂海律師という僧が稚児に恋をし稚児の死をきっかけに真の悟りを得る内容の稚児物語だが、山伏（実は天狗）が稚児をさらう趣向が早くに『角田川物語』以下の隅田川物に取り込まれるなど、隅田川物と深い関係にあることが指摘されている。[8]『秋夜長物語』で桂海が恋い焦がれる対象で結局桂海を悟りに導くことになる稚児（実は観音の化身）の名は、「梅若」である。既に指摘があるように、『都鳥妻恋笛』の執筆に当たって其磧が先行の隅田川物や「梅若」の話などを集め取材した中に、『秋夜長物語』も入っていたであろう。だとすると、『秋夜長物語』中の、桂海が夢で見た稚児と夢と全く同じ設定で現実に会うという趣向が通うところから、『伽婢子』四の二の利用を思いついたのではなかろうか。

（一の二・三）吉田少将の新たに設けた下屋敷内の土中から怪しい笛の音がする。掘ってみると、土中入定した老僧が笛を手に西向きに座した姿で現れる。吹笛上人と称された僧（放埒故勘当された上総大輔員貫）が土中入定したものの、直前に見た美女（実は班女）への愛執が残り、土中で七年も往生できず念仏を唱え笛を吹いていたのだった。少将は屋敷内の一室へ上げ介抱し、上人は一心に念仏を唱える。自分に往生失敗の原因があることを知った班女は、志賀寺の上人の故事を思い出し、吹笛上人に言葉を懸けて妄念を晴らさせようとする。しかし、班女を見た上人は妄執を却って募らせ、枕を交わすよう迫る。班女が拒むと、上人は天狗の姿に豹変。観音像の守り袋のため班女に近付けず、代わりに松若丸を摑み「此子がほしくば我になびけ。なびかぬ内はかへさぬぞ」とさらって行く。跡に天狗坊の忘れて行った笛（「楊柳笛」という名笛）が残っており、少将は天狗を招き寄せるよすがになるかと、笛を梅若丸に与え稽古させる。

入定僧が愛執ゆえ往生に失敗し土中より掘り起こされる

趣向は、既に指摘のある通り『金玉ねぢぶくさ』一の二に拠る。典拠では土中から鉦の音がするのを、其磧は笛に変えている。[9]『金玉ねぢぶくさ』は隅田川物でない。にも拘わらずここで重要なプロットとして採るのには、やはり隅田川物からの連想が働いているのではなかろうか。隅田川物の多くで、母が梅若の死を知り塚に泣き伏すクライマックスの場面、土の下から梅若の「声」（もしくは「念仏の声」）が聞こえて来る。〈土中より音〉という重要なプロットが『金玉ねぢぶくさ』と共通する。また、土中入定までしながら直前に見た美女への愛執を払えぬ上人像には、『秋夜長物語』の主人公桂海像（真の出離生死の道を究めようと籠り行をして、満願の夜に夢に見た美しい稚児の面影が以後離れない）や、歌舞伎の『藪入隅田川』[10]（宝永七年、江戸森田座、絵入り狂言本が残る）の敵役藤原ださいのせう像（姫への恋慕の念を断って出家し諸国を修行したが、姫を見て再び煩悩の炎が燃え上がる）が投影しているのではなかろうか。

なお、筋立てを各典拠と比較してみると、事態の展開の要因に「色恋」を置こうとする、其磧の意図が窺える。『金玉ねぢぶくさ』も『都鳥妻恋笛』も、土中入定の僧が直前に見た美女への愛執により往生できぬ点は同じだが、『金玉ねぢぶくさ』は入定が純粋な宗教心からの行為であるのに対し、『都鳥妻恋笛』は入定自体色欲からと変えている。即ち吹笛上人は自ら次の如く告白する。

とても此世にながらへゐても。花咲身にもあらねば。定に入て死で再び此土に生れかへり。周防内侍のやうなる艶女と枕をならべてたのしまんと。仏果をのぞまず。人間に再生せん事を胸におさめて入定せし

入定とは本来究極の欣求浄土の捨身行であるべきなのに、これではもとより往生など果たせるはずがない。班女に再びまみえた上人は、「天狗道へおちて成とも。思ひをはらさで置べきや」と天狗の姿となる。土中で愛執ゆえ往生できなかったのは〈往生失敗譚〉だが、ここは自ら天狗道へ堕して行く〈往生拒否譚〉の様相を帯びる。進んで天狗となる趣向は、『双生隅田川』三段目で吉田の旧臣淡路七郎が切腹し腸を摑んで投げ自ら天狗と化現する趣向に拠るか。但し、『双生隅田川』は知らずに主君を殺してしまった申し訳に天狗となって主家を守ろうとするのに対し、『都鳥妻恋笛』は愛執を果たすための化現である。

天狗が松若丸をさらうのは、近世の隅田川物の定型と言って良い。誘拐の理由について、古浄瑠璃や『角田川物語』は自らの学問を誇る松若の慢心とし、『秋夜長物語』は叡山を目指し歩き疲れた松若が「天狗天怪物なりとも、我等を取て比叡の山ゑ登せよかし」と口にしたのをきっかけと

する。[11]『双生角田川』は、悪臣達が比良山の大杉を伐採した祟りとする。『都鳥妻恋笛』はこれを班女をなびかせるための人質取りという、色欲ゆえの誘拐へ変えている。

ストーリーが前後するが、班女が上人にまみえて愛執の念を滅却させようと思い立つところで、志賀寺の上人の故事を引く。諸書に載るが、ここは『太平記』巻三十七の一節を、贈答歌を省く以外は文章をほぼ忠実に取っている。[12]但し、『太平記』の志賀上人は京極の御息所の手を握り歌を交わして愛執の念を去ったのに対し、『都鳥妻恋笛』の吹笛上人は愛執ますます募る形に変えられている。また、さらわれた松若丸の無事を願い吉田少将が祈禱を頼む「教誡律師」の名は、『秋夜長物語』の主人公桂海律師と縁があろう。[13]

（二の一～三）吉田少将は子をさらわれた事を悲嘆し重病の床に伏す。少将の義理の叔父の百連が、みずぼらしいなりの浪人を同道して見舞いに訪れる。浪人は班女と早くに別れた実父で、古主へ帰参が叶うことになり拵えのための合力を娘から受けられるよう、百連に仲介を頼んだという。浪人は班女や皆と対面。少将平癒を祈願する代参から帰った松井源五が浪人を見て、浪人の正体が穢多の九之助であると暴露し、屋敷から追い出す。穢れた血筋では梅若丸に家督は継がせられぬと、百連は我が子百丸に家督を継がせようとする。実は、お家乗っ取りを謀り百連と佞臣松井源五の仕組んだことであった。

この巻の眼目とも言える、贋実父を仕立て家の横領を謀る趣向は、歌舞伎からの影響が考えられる。悪者側が贋者を仕立てる趣向は、『出世隅田川』（松井龍存に頼まれた須藤弥八が贋不動となり入り込もうとする）や『都鳥班女扇』[14]（享保五年、京沢村座、少将の叔父松井源五が、少将没後お家横領を謀り浪人を贋少将に仕立てて帰京）からの発想か。ちなみに、篠原進氏によるとこれは晩年の其磧の好んだ趣向らしく、『都鳥妻恋笛』の直後の『咲分五人娘』（享保二十年刊）〔贋若殿〕や『愛護初冠女筆始』（同年刊）〔贋姫君〕にも用いている。[15]

実父が判明した故に班女が窮地に立つのは、『藪入隅田川』（班女の実父が悪者藤原ださいのせうと分かり、「お家の悪名を立てぬため」と粟津六郎が班女を追い出す）に先例が見える。

代参から帰京した松井源五が「当家の災難は家中の穢れが原因」との神託が出たと報告する。悪者が偽りの神託を巧む趣向は、歌舞伎の『早咲隅田川』（宝永二年、江戸市村座、絵入り狂言本が残る）の、悪心の継母が巫女に化け贋の神託を告げる趣向に相通じる。

（三の一・二）少将が死去し、家督を巡り百丸を立てる百連・松井源五と、梅若丸を立てて主家を守ろうとする忠臣山田三郎

が対立。山田は関白へ百連達の悪計を訴えるものの、少将の実母妙薫院が百連側に立つ故利なく、却下される。班女と梅若丸の身を守るため、山田は二人を連れて落ち延び、坂本辺の浪人七浦専左衛門を頼る。七浦と梅若丸の外出中、見知らぬ武士が駈け込み、敵討ちを果たしたが追われているのでかくまって欲しい旨山田に頼む。山田はやむなくこれをかくまい、追っ手の武士達と斬り合いの末、討たれて首を取られる。実は敵側の策略であった。七浦は班女・梅若丸を連れ、近江に住む甥の三隅大学夫婦を頼る。

吉田少将の母（班女にとっての姑）の存在は、初期の隅田川物にはなく、元禄末以来の歌舞伎でお家騒動の色彩を濃くするようになって、取り入れられた設定である。『出世隅田川』・『けいせい角田川』（宝永元年、江戸山村座、絵入り狂言本が残る）・『早咲隅田川』に母の設定がある。特に『都鳥班女扇』は、少将の死後姑が弟松井源五（少将にとって叔父）と結託し家の横領を謀る形で、『都鳥妻恋笛』と設定が同じである。但し、歌舞伎がいずれも継母とするのに対し、『都鳥妻恋笛』の妙薫院は少将の実母であり、結果的に百連側に立つにしろ兄弟で結託したとは描かれず寧ろ百連に利用されている。

家督争いの訴訟で梅若丸側が負けるのは、『双生隅田川』で訴訟の結果善側の言い分が認められ悪側が退けられるのを逆にしている。

忠臣山田が班女・梅若丸を連れ逃れるくだりは、『角田川物語』で忠臣粟津六郎が御台（梅若の母）と梅若丸を西坂本の知人の許へ落とす場面や、『都鳥班女扇』で忠臣粟津六郎が班女・梅若を連れ自らの屋敷に逃れる場面を利用したものだろう。

山田が駈け込みの武士（実は贋物）を葛籠（つづら）の中にかくまい追っ手と戦うのは、歌舞伎の『紅梅隅田川』（元禄十五年、江戸山村座）で、僧の道心（実は悪者の黒髪皇子）が班女と梅若を誰とは気づかず梅若を葛籠に入れてかくまい、追っ手と戦う場面の流用か。

三隅大学夫婦は、叔父の頼みでもあり「此親子の衆をかくまひおふせ。世にも出し申さば。我等夫婦が末々の為にも宜しかるべし」と打算もあって班女達を丁重にかくまう。これは、説経浄瑠璃『すみだ川』（近世初期から語られていたらしいが、元禄から享保にかけての刊行と推定される正本が数種残る）で、粟津六郎がおじのごん太夫夫婦に頼んで、御台（梅若の母）をかくまってもらうものの、ごん太夫が御台に味方しても得がないと打算から追い出すくだりを逆にしたとも思える。説経浄瑠璃『すみだ川』の、班女・梅若を守護する粟津六郎が敵側に討たれ首を取られるくだりも、『都鳥妻恋笛』に採られている。

（三の三・四の一）七浦専左衛門が班女に恋慕し、思いを晴らせないなら梅若丸ともども殺すと迫る。その場逃れを言う班女に、専左衛門が抱き付く。梅若丸が目撃し、不義をするような二人は頼り甲斐がないと見限り、奥州の忠臣粟津三郎を尋ねんと一人密かに家を出る。梅若丸の出奔を知った大学が追いかけようとするのを、専左衛門が引き止める。専左衛門は、甥大学が敵側に寝返ったと誤解し、甥の恥を表さず班女達を出奔させ助けるため、偽りの恋慕を仕掛けたのだと明かす。専左衛門と大学は急ぎ梅若丸を追う。

偽りの恋慕の趣向は、歌舞伎から採ったものだろう。周知の如く歌舞伎では心ならずの懸想や愛想尽かしの趣向が多用され、先行の隅田川狂言でも『紅梅隅田川』と『けいせい角田川』に忠臣がお家のため偽りの懸想を仕掛ける趣向が使われている。最も注目すべきは『都鳥班女扇』の、次の筋立てである。

西坂本の百姓安太夫夫婦は、班女をかくまっている。当家の息子やそ五郎（役者替名と挿絵では「弥兵衛」）が班女に恋慕し、意に従わねば殺すと迫る。妹娘おくまが兄から守ろうと班女を連れ出す。班女のいないことに気づいたやそ五郎が駆け出すのを母が引き止め、やそ五郎は母を刺し殺し父をも傷つける。おくまと班女に追い付いたやそ五郎は、親達が敵側に内通しているのを知った故の偽りの懸想であったことを明かす。

設定がよく似ており、『都鳥妻恋笛』への影響が大きいのは明らかである。しかし、忠義のための親殺しは、『都鳥妻恋笛』に採られていない。悲劇性を除いて利用されている。

また、梅若丸が自ら家出をする趣向は、『双生隅田川』と共通するが、『双生隅田川』は父の勘気を恐れてのことだったのに対し、『都鳥妻恋笛』では母の不義現場の目撃という、やはり色が原因になっている。母を残して家出し嘆かせる筋立ては、西沢一風の浮世草子『女大名丹前能』（元禄十五年刊、各章に謡曲を付会した作）中の謡曲『隅田川』をやつす章にも通う点がある。五の一「面影わたる角田川」がそれで、重病の母と暮らす妹娘が、遠くで遊女勤めする姉を迎えに、母の引き止めるのを聞かず出て行く。母は悲嘆し食を断ち死のうとまでする。同じ隅田川物のやつしである上、〔兄弟の下の方が母の許可なく家出し、残った母が慨嘆〕というプロットが共通し、其磧が参照した可能性もあろう。

（四の二）梅若丸を探す専左衛門と大学は、隅田川の渡し舟に乗る。渡し守の懺悔話から、悪者達と結託した贋実父だと分かる。口封じに殺されかかったところをかろうじて逃れ、東下して渡し守になっていたのである。舟に笛の音が聞こえ、渡し守は話を続ける。（以下渡し守の語り）浅草の野中に一軒

家があり、姥と娘が住んでいた。常々旅人を泊めては石で殺し衣装を奪った。ある旅人が宿を借りようとした時に、笛の音と用心を促す内容の和歌が聞こえる。お蔭で旅人は危機を脱することができた。笛の音は、旅人の日頃信ずる観音の助けだった。その一軒家に、猿轡の門兵衛という性悪な人買いが婿入りし、商売の実入りが悪いのを強欲な姑に責められる。闇夜に斬取りを思い立ち、通りがかりの者を殺して荷を奪ったところ、相手は何と姑であった。家にいられなくなり寡暮らしになった門兵衛は、梅若丸をかどわかし佐渡へ売り飛ばそうとする。抵抗する梅若丸を門兵衛が打ちたたく。弱った梅若丸は、自分を埋め目印に柳を植えて欲しい旨言い残して死ぬ。

悪人が渡し守となった舟に忠臣達が乗り合わせ悪を懲らしめる趣向は、『紅梅隅田川』に前例がある。一つ家伝説は地誌『増補江戸咄』（元禄七年刊）が直接の典拠と思われ、隅田川沿いという地縁のみならず「笛」が伝説の核になっている点でも『都鳥妻恋笛』と繋がる。[16] 梅若丸が離島に売られることを拒み折檻され、介抱を受け一旦は息を吹き返しながらも死去するくだりは、『双生隅田川』と同じ。

忠臣粟津六郎が人買いを斬り主君の仇を討つのは、古浄瑠璃『隅田川』より採る。但し古浄瑠璃が仇と知って討ち果たすのに対し、『都鳥妻恋笛』では仇と知らずに討って後から主君の仇と分かる形になっている。

人買いの「猿轡の門兵衛」の名は、『角田川物語』で人買いが梅若丸に「さるぐつわをはませ」と二度も出て来ることに拠るのだろうが、人買いの人物像に注目したい。歌舞伎の隅田川物『出世隅田川』・『早咲隅田川』・『愛兄隅田川』（宝永五年、江戸市村座）・『隅田川』（宝永六年、京万太夫座、正式外題不明）ではいずれも吉田家の旧臣が主君とは知らず梅若丸を殺してしまう趣向をとり、それらを集大成したとされる『双生隅田川』の人買い猿島惣太も同様である。『双生隅田川』とそれに至る演劇の隅田川物を論ずる場合、従来人買い像に着目し、忠臣が主君を殺してしまう運命のいたずらや自責の念に責められる内面の苦悩といった悲劇性に、焦点が当てられることが多い。[17] だが、其積はそれを採らない。ここで、典拠になったと思われる（A）『都鳥班女扇』のやそ五郎の親殺し・（B）『双生隅田川』などの人買いの梅若殺しと、『都鳥妻恋笛』の（C）人買い門兵衛の親殺し・（D）人買い門兵衛の梅若丸殺し・（E）粟津六郎の門兵衛殺しという、対応する場面の殺人同士を比較してみたい。〔A・義理ゆえに実の親を殺す〕〔B・忠臣が知らずに主君を殺してしまう〕という悲劇を、其積は〔C・悪人が知らずに極悪人である義母を殺す〕〔D・吉田家と無縁の悪人が誰とは知らず梅若丸を殺す〕・〔E・忠臣が知らずに主人の仇を討つ〕という形に作

り替えている。梅若殺しを（B）から隅田川伝承の古い形の（D）に戻し、（A）・（B）の親殺し・主君の仇討ち・誰とは知らず討つ点を、（C）（E）に作り替えている。改変後は殺されても自業自得・討って当然の形であり、誰か知らずに殺すという巡り合わせを踏襲しながらも、決して悲劇にならない。其磧は（D）の梅若伝承の根幹の悲劇のみを残し、歌舞伎・浄瑠璃が隅田川物に加味した運命劇・内面劇としての悲劇性を除いている。深刻過ぎる要素は、其磧の浮世草子には採られないのである。

（四の三）専左衛門と大学は渡し守を捕らえ、味方に付ける。近在の者達が梅若丸を塚に葬り、粟津は縁の者の尋ね来る便りとするため笛を吹く。一方、班女は梅若丸を慕ってさまよい隅田川沿いに至る。深夜に笛を吹く少年（実は姿を変えた梅若丸の幽霊）が現れ、班女を自邸に案内し宿を貸す。まどろんだ班女の夢に梅若丸が元の姿で現れ、自分の死や前世からの因縁を母に告げて消える。班女が目覚めると、屋敷はなくて塚の前。班女は泣き崩れる。

梅若丸の霊と母との再会は梅若伝説の中心となる場面だが、既に指摘のあるように怪異小説『伽婢子』八の四が利用されている。そもそも、笛の音とともに現れた美少年に誘われ一夜を明かし後に幽霊と分かる趣向は、御伽草子『幻夢物語』や怪異小説『曽呂利物語』（寛文三年刊）・『諸国百物語』（延宝五年刊）、浮世草子『好色五人女』（貞享三年刊）などにも見える。[18] 既にある程度類型化していた趣向と考えられるが、何箇所か文辞の一致も見られ木越氏の指摘の通り『伽婢子』が直接の典拠であり、場面構成も大きくこれに拠っている。また、梅若丸の霊が庵へ母をいざない宿を貸し、寝入った母へ自己の死を告げる場面に、歌舞伎の『出世隅田川』がヒントを与えたであろうことも木越氏の指摘がある。

（五の一）梅若丸の塚で粟津六郎・専左衛門・大学と班女が再会。皆が梅若丸死去のいきさつを知る。松若丸を取り戻すため、班女は自ら言い出して遊女に再び身を沈め、天狗坊をおびき寄せる。吉原扇屋の太夫野上となった班女の許に、早速客として天狗坊が現れる。班女がなびくふりをして、天狗坊は松若丸を返す。いよいよ床入りという段になり寝所に入ると、何と班女は髪をおろし出家姿に変貌している。それを見るやいなや天狗坊は愛執の念が去り一瞬に白骨と化す。

班女が自ら進んで遊女の身に沈む趣向は、歌舞伎にありがちの趣向で、隅田川物では『けいせい角田川』の筋立て（班女を請け出す工面のため山田三郎が女房おしげを売り、おしげは遊女となり「今班女」と名乗る。その娘花子は母を助ける金を工面しようと自ら遊女に身を沈める）がヒントを与えた可能性がある。

天狗が松若丸を返すのは、既存の隅田川物の定型を踏む。但し、梅若丸を返す理由は先行作と異なっている。説経浄瑠璃や古浄瑠璃では天狗が粟津六郎の忠心を愛でて返す。『角田川物語』は、仏の加護によって。『双生隅田川』は、旧臣の自ら化現した天狗が、主殺しの罪滅ぼしと主家安泰のため。一方、『都鳥妻恋笛』の天狗坊は、「心にだにしたがふて給はらば。人質に是迄留置し松若丸を戻し申さん」と、あくまで色のための取引材料にしている。ここにも、筋の展開の要因に「色」を据えようとする、其磧の意図が窺える。

天狗が一瞬に妄執を去り白骨と化す場は、前出の『金玉ねぢぶくさ』一の二に拠る。但し、『金玉ねぢぶくさ』の入定僧は執する対象が既に死んでいることを聞いた途端に愛執を去って白骨化するのを、『都鳥妻恋笛』は執する対象の出家姿を見た途端というふうに、より視覚的で印象的な形に変えている。これには、『秋夜長物語』の桂海が恋慕する梅若の死をきっかけに真の悟りに至るくだりや、隅田川伝説として旧来伝わっていた梅若母の顚末（木母寺で梅若の後世を弔っていたが、鏡が池に映った自分のやつれた出家姿[19]を見て一瞬に悟り入水）が投影していよう。

（五の二・三）班女は隅田川沿いに庵を建て、夫と梅若丸の菩提を弔う。粟津六郎と専左衛門は松若丸を守護し上京。渡し守を証人に百連の悪行を関白へ訴え、松若丸に家督相続が許される。松若丸達は自力で百連らを討とうと志し、松若丸は草紙売りに身をやつして百連の館に潜入。百連に仕える妾の山路に正体を見顕されるが、実は山路は山田三郎の娘しのぶで、父の仇を討つため妾奉公をしているのだった。本心を見極めた上で二人は協力を誓う。百連と松井源五は悪者同士で仲違いし、山路は主人百連を守る体で松井を斬り、父の仇を討つ。吉田の忠臣達が松若丸の許に集まり、百連館に討ち入って攻め滅ぼす。吉田家は栄える。

粟津六郎が松若丸を守護し上京後お上に訴え正嫡と認められるくだりは、『角田川物語』から採ったもの。身をやつし敵地に潜入する趣向は、『双生隅田川』で班女と唐糸が花火売りに身をやつして百連の宴席に潜入する趣向を改変したものだろう。敵状を探る松若丸が春雨に遭い雨宿りするのを、百連の妾達が見つけて見とれる。この場面は、『秋夜長物語』で桂海が春雨の中雨宿りをしていて、恋しい稚児梅若の姿を見つける場面と通い合う。

山路が松井源五になびいたと見せて油断させ、松井の刀を抜いて斬りつける趣向は、歌舞伎の『班女が扇』（享保元年、京大和山座）や『銘剣隅田川』（享保二年、江戸森田座）に拠るものと思われる[20]。江戸歌舞伎の隅田川物で好まれたらしい女武道[21]を、ここに取り込んだとも思える。な

お、山路の名は享保八年に実際にあったらしい女の敵討ちの討手の名を採るものだろうか。[22]

以上、長々と先行の隅田川物との関係を見てきた。本作が特定の作に寄りかかるのでなく、従来見落とされていた上方歌舞伎を含め、いかに多くの隅田川物の諸作を糾合する形で書かれていたか了解されよう。一方で採らない要素もあった。歌舞伎の隅田川物に見られる深刻な愁嘆場はそのまま採らず、その悲劇性を大きく薄める改変を施して利用している。

三　笛、および賤民

『都鳥妻恋笛』の中の、笛と賤民のモチーフについて考えてみたい。特に笛は、作品名にわざわざ「笛」と出すことからも、その重要性が窺われる。本作は名笛物語という性格も帯びており、笛に関する顚末のみを拾い上げると次のようになる。

名笛の名は「楊柳笛」。唐の玄宗皇帝が楊貴妃と水辺に出て、川上よりこの笛が流れ来るのを拾う。音律に通じる玄宗はこの笛で楊貴妃に美曲を教え、この笛を吹く時は必ず柳の葉が散り乱れた。笛の名人隅田（くうでん）が玄宗より下賜されたが、遣唐使で入唐した福原掃部頭貞厚が隅田に秘曲を習いこの笛も授かる。以後代々楽人を勤める福原家の家宝として伝わる。ところが貞厚の子孫福原木工頭を闇討ちにして、上総大輔員貫（天狗坊）が笛を奪う。松若丸を掴み飛び去った跡に笛が残され、吉田少将は梅若丸に与えて吹かせる。梅若丸達が頼った三隅大学（福原木工頭の遺子）が、梅若丸の持つ楊柳笛を見つけ、少将より梅若丸が授かったことを聞き出す。少将を親の仇と思い込んだ大学は、笛を取り戻して家を再興し親の仇も討とうと一時期梅若丸を狙う（すぐに誤解は解ける）。ところで唐の隅田は下賜の名笛を許しもなく日本へ渡した咎で、斬首され地獄へ堕ちる。「都卒の内院」の儀式で笛の役が不足し、娑婆へ再生し楊柳笛を取って来て「万秋楽」の笛の役を務めたら地獄から救ってやるという仏勅を受ける。こうして梅若丸として日本に生を受けたが、前世の名「隅田（くうでん）」と同じ名の隅田川で死ぬことになった。笛の持ち主が転々とし、笛はそれぞれの場で重要な舞台廻しの役割を果たしている。[23]「隅田」故隅田川で死ぬというくだりなどは「ややこじつけすぎの感は免れない」[24]が、土中の入定僧の鉦を笛に変えたり、笛の音が旅人を救う一つ家伝説を組み入れたり、梅若丸の霊の現れるよすがの念仏を笛に変えたりしているところから、「全体を「笛」のモチーフで一貫させようとする作者の強い意図をみてとることができる」[25]。

木越氏は、笛のモチーフが本来隅田川物にない要素であり、典拠とした『伽婢子』八の四（＝美少年の霊が笛を吹

き現れる話）がヒントになったかと推定される。確かに、其磧の時代物は時として全く無関係なものを連想によって導入することがあるという指摘がある。[26] だが、本作の笛に関して言えば、隅田川物と無関係とは言い難く、其磧が隅田川物の素材を集める中で、かなり早い段階から創作のモチーフの一つとなった可能性がある。

そこで注目したいのが、謡曲『笛物狂』である。梗概は以下の通り。

少年松若が父により山寺にやられるが、学問せず笛ばかり好むというので、勘当され諸国を巡る。親は子を想い物狂いの様になり、信濃川の渡しに至る。たまたま同船した松若が吹く笛の音に父が気づき、めでたく親子の再会が叶う。

『笛物狂』は『丹後物狂』の古曲とされる。『笛物狂』が謡曲『隅田川』成立時から隅田川物と深い関わりがあるという指摘がある。[27] 謡曲の系統に其磧がどれだけ通じていたか不明だが、「松若」の名や、子を慕う物狂いという主題、渡し場でのクライマックス等の『隅田川』との共通点から、其磧の取材対象に入っていてもおかしくない。だとすると、『都鳥妻恋笛』で梅若丸の幽霊が笛の音とともに登場する趣向が、『笛物狂』の笛が親子再会をもたらす趣向にヒントを得、『都鳥妻恋笛』で少将が梅若丸に笛を与え吹かせるのは、『笛物狂』で父が松若の笛好きを怒り勘当する設定を逆にしたとも考えられよう。

隅田川物が業平伝説を介して、笛と繋がっている可能性もある。業平が東下り伝承により隅田川と縁深いのは言うまでもないし、『都鳥妻恋笛』の「都鳥」「妻恋」の語自体が『伊勢物語』の東下りの段を想起させる。業平と笛を結びつけるものに『神道集』四の十八・御伽草子『青葉の笛の物語』などがある。御伽草子の方の梗概を引く。

内裏近くに毎夜美しい笛の音が聞こえ、業平が笛の主を捜し出して来る旨の宣旨を受ける。業平は自身も笛を奏でつつ笛の音を追い、笛の主である稚児に仙境に導かれ、名笛「青葉笛」を授かる。業平はこれを天皇に献上し、立身を続ける。

夜中に笛を吹いて現れる美しい美少年像は、中世に流行した稚児物に見られがちとは言え、『都鳥妻恋笛』の梅若丸の幽霊と通い合う。

木母寺の『梅若権現御縁起』（延宝七年の年記あり）には、梅若丸が月林寺と東門院の闘諍のさなか寺を抜け出す際に笛を忘れ、これを惜しんでわざわざ家来に取りに行かせる（その結果家来は敵に討たれ、梅若丸は一人さまよって人買いにさらわれる憂き目を見る）記述がある。巻子本の写本で、其磧が目にしたとは考えにくいが、隅田川伝承と笛が早い段階から近いところにあった証左とはなろう。

もう一つ、賤民のモチーフについて。班女の実父を「穢

多」に仕立てる謀略が班女達を窮地に陥らせるわけだが、賤民のモチーフは本来の隅田川物に備わっていた訳でない。其磧が直接ヒントにしたのは、『双生隅田川』三段目白洲の場で大掾が班女をなじる「あの女は元美濃の国野上の宿の傾城。乞食非人の娘も知れず。万人に枕を並べ身の汚たる女」というセリフや、上方歌舞伎の『隅田川』[29]（享保八年、京榊山座）の乞食の趣向だろう。

ただ、先行の江戸歌舞伎や『双生隅田川』で勇ましい女武道を見せる班女が、『都鳥妻恋笛』ではそのような活躍をせず殊更に卑しい出自と貶められ憂き目を見ている。こうした班女の〈負〉のイメージの背景とまで言えるかどうかは別として、京都繁昌神社（別名班女神社）の班女伝承[30]や、古来「班女」の名が捨てられた女の代名詞のように使われていたこと[31]、隅田川伝説の伝播に穢多村等に属する芸能民が関わっていたらしいこと[32]などが気になる。ちなみに班女塚の伝承については、井上頼寿氏の『改訂京都民俗志』「井」の部には次のようにある。

繁昌社の水

下京区高辻通り室町西入る北側の繁昌社は市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）を祭り（中略）井戸の上に石を置き、その上に小祠がある地が元である。神社では石の下は井戸といい、近所の民家では池の跡といっている。班女社と称したころの社の旧地で、醜女班女の君が世をはかなんで入水した跡であると伝えられている。京都の伝説名所の一で、古来この路地の前を婚礼の行列は通らぬ風習であった[33]。

徳江元正氏は右の井上氏の記述を引き、班女をもの妬みの女とする口承伝承が謡曲『班女』の成立に感化を与えた可能性に言及しておられる[34]。

また、『都鳥妻恋笛』に見える殊更に「穢多」を賤視する記述や筋立てには、正徳・享保期に幕府・諸藩の身分統制が強化され「穢多」差別もひどくなることの反映を見ることもできよう[35]。

四　其磧の構成法

先行の隅田川物を利用する際、前述の如く其磧は、演劇の深刻さ・凄惨さを薄める形で利用していた。演劇通の其磧は、演劇と浮世草子の表現効果の違いを認識した上で、あくまでも読者へ娯楽・慰みを提供することを意図して創作したと考えられる。

また、本稿第一節の章毎の梗概を概観しても分かるように、仮名草子や古浄瑠璃で既に確立していた梅若伝説の骨組みに基づく部分は、非常にストーリー展開が早い。それに対して、策略を弄しての対立や身内同士の腹のさぐり合

いといった、当世風の、新たに加えられた部分は、会話を多用しストーリー展開がゆっくりである。話の設定を確とした典拠に拠って整えつつ、会話文を駆使しながら筋を大きく展開させたり逆転させたりしてストーリーをふくらませ、同時に当世風の読みやすい文章を成している。其磧の作品に共通して見られる特徴と言って良い。

『都鳥妻恋笛』は周知の如く、後に『梅若丸一代記』（天明八年刊）、『梅花流水』（天保十三年刊）と二度に亘り改題し読本風に仕立て直して再刊される。[36] 横山氏は再刊の事実に着目され、『都鳥妻恋笛』が笛という小道具を駆使し長編時代小説に仕立ててある点に読本と繋がる特徴を指摘しておられる。[37] 木越氏は、『都鳥妻恋笛』が怪異小説に取材し伝奇性・幻想性といった要素を取り込んだことに、読本と繋がる点を見ておられる。[38] そして、笛は、古来神や霊と感応したり奇跡を起こしたりする霊性を帯びたものとされる楽器であり、[39] 幻想性を醸し出す道具立てとして誠に有効だったと言える。

加えて、『都鳥妻恋笛』に見られる其磧の執筆姿勢（取材法・構成法）自体が、読本に通じる面を備えているのではないかと思う。先学の既に紹介されるところだが、『白鷺洲』[40] 巻四の其磧に関する記述をここに引く。

当分、草双紙なと書出候者に其跡（ママ）と申、博学多才の者有之由。其者二三冊ものを書候にも直段何程と究、五冊ものは拾両に而書調事候由。夫をなぜと申に、たとへおかしき事を書とも、其理分明ならさる時は其書物判（ママ）に不起候故、故事来歴を見合、一々引くらへ、由緒慥成事を以書立候故、中々気根不届候。右通高直成其代物、書たてさる以前に請取、気をなくさめんため、至極結構成酒又は菓子なとをこしらへ、衣類にも羽二重なとの能きをゑらひ着し、踊子又は三味線なとにて一日をくらし候へは、最早右代物は則時（ママ）に捨り候故、明日は又もとのやふれ衣裳にかゆをすゝる事に而、其後一時に二三冊もの、四五冊ものを書調候由。幾度も其致様の由。

扨、右其跡事、勝而広もの故、或町人参候而申候は、其方事日本に不知事は無之筈に候。たとへは諸国の大名の系図、又は名有人の咄、商売の事に至り而も、夫々御あかし可被成事に候へは、当分あきなひを致候はんに、何ほと致候はゝ、可然哉の由申候に、米か当分の商売に能候。先つどこの国に而は何程、何方に而は何程、夫々算盤を以、此員数の積に相当り候と、水をながし候由申候へは、致落着由。左候而右町人申候は、夫程商売の事に付而も御心覚有之候に、三冊五冊の書を出、其代物を纔計御取被成、日々御暮被成候半（ママ）より

は、右通りの大商売を以一度に被成様も可有之哉と申候に、夫は其跡にも存候事にて候へとも、不数寄にて候由申候事。

根を詰めて精力的に素材を集め一々典籍に当たり、調べ上げた上でないと作品化しない。それでは根気が続かないので、原稿料は一度にぱっと遊んで使ってしまう。商売の才もない訳ではないのだが、好きなことしかやろうとしない。「博学」がどの程度かはともかく、〈学者気質〉とでも言うべき凝り性な其磧の性格と創作態度が窺える。現に『都鳥妻恋笛』が隅田川物を中心とする先行文献をいかに多く博捜し、いかに多く利用していたかは、先に詳述した通りである。

『都鳥妻恋笛』は、整理すると次の如き話の要素から成り立っている。

A

①少将・班女の恋愛譚　二人の夢の逢瀬と再会（一の一）

②往生失敗譚　愛執故の入定の失敗と天狗化、愛執の滅却（一の二・三、五の一）

③名笛由来譚　名笛楊柳笛をめぐる顚末（一の二・三、三の三〜四の三）

④お家騒動譚　吉田家の家督争い（二の一〜五の三）

⑤梅若伝承譚　梅若丸の横死、物狂いとなった母との再会（四の一〜三、五の二）

B

⑥敵討ち譚　〈その1〉三隅大学の敵討ち（一の三、三の三、四の一、五の一・二）
〈その2〉山田三郎の娘山路による敵討ち（三の一・二、五の二・三）

⑦策略譚　〈その1〉班女の贋実父（二の一〜三、三の一、四の二・三、五の二）
〈その2〉贋の駈け込み、山田謀殺（三の一・二）
〈その3〉専左衛門による偽りの恋慕（三の三、四の一）
〈その4〉松若丸の変装、山路の看破（五の二）
〈その5〉山路による偽りの好意（五の三）

⑧一つ家譚　浅茅が原の一つ家伝承（四の二）

⑨不慮譚　人買いによる姑殺し（四の二）

Aが話の基本的設定や全体に関わる要素で言わば縦糸に当たり、Bは途中に散りばめられたエピソード、言わば横糸の趣向に当たる。括弧内はどの章に亘っているかを示している。Aのうち①④⑤が隅田川物に早くに備わっていた既定要素で、他はあとから隅田川物に付け加えられたり其磧が加えたりした要素である。要素同士が複雑に絡み合っており、当然のことながら一つの章で幾つかの要素を合わせ

持つ章が多い。

①～⑨のどの要素も破綻無く展開し、要素同士が齟齬することはない。⑤が悲劇で終わることは動かし得ないが、他は全てめでたく納まり大団円を迎えている。「構成がやや緊密を欠き」[41]「其磧の作としては傑れたものでない」[42]という厳しい先学の見方もあるが、これだけ多くの要素を破綻無く継ぎ合わせてそれぞれを因果の理に叶う形で結ぶ手腕は、なかなかのものと言って良いのではあるまいか。少なくとも、同様に歴史物を扱っても筋が拡散してまとまりを欠く西沢一風の作や、奇を衒うあまり破綻をきたす場合のある多田南嶺の作より随分まとまりが良いし、其磧の時代物の中でも出来が悪い方ではないと思う。しかも、笛の道具立てに加え、「色」により事態を展開させようとする作意も一貫している。徹底して素材を博捜し取材した上で複雑な筋を構える構成力や、道具立てや作意により全体を貫こうとする行き方は、馬琴に代表される読本に通じるところがあるように思われる。

凄惨さや深刻さを伴わず、会話体を多用した平易な行文で綴るのは、其磧の作品に通底する特徴である。ありきたりと言ってしまえばそれまでだが、その安定感と気楽さが、当時の読者には喜ばれた。その上に如上の読本に繋がり得る要素を加味し得た『都鳥妻恋笛』は、従来の評価以上に注目して良いのではなかろうか。

五　おわりに

近世の隅田川物の展開（ストーリーの拡大と変化）について、鈴木圭一氏は「梅若物の小説類は、演劇の後を追っている」と述べておられる。[43]確かにその通りで、『都鳥妻恋笛』にも当てはまる。ただ、『都鳥妻恋笛』の笛吹上人（天狗坊）の、僧侶の身でありながら愛欲に囚われ此界・異界の境を越えて女に執する様は、清玄桜姫物の清玄像と通うものがある。想像に過ぎないが、以後歌舞伎で隅田川物と清玄桜姫物が綯い交ぜられて行くことに影響した可能性はないだろうか。

以上、『都鳥妻恋笛』を扱い、其磧が先行作に取材しつつ長編の娯楽小説として時代物を創作する手法を見て来た。なお、其磧の時代物の中での作風の変化や、南嶺等の時代物との比較、時代物と演劇の関係の再考など、其磧の時代物に関してはまだまだ課題が多い。それらについては稿を改めて考えたい。

〔注〕

（1）隅田川物の系譜を通史的に辿る主な論考に、次のものがある。

○細井栄吉氏「隅田川劇考『双生隅田川』について」（『国文学研究』5号、昭和10年11月）
○志田義秀氏「梅若伝説の流れ」（『日本の伝説と童話』昭和16年、大東出版社）
○白方勝氏「『双生隅田川』の成立と人買物としての意義」（『新居浜工業高等専門学校紀要』2号、昭和41年3月）。『近松浄瑠璃の研究』（平成5年、風間書房）に所収
○落合清彦氏「〝清玄桜姫物〟と〝隅田川物〟との関係試論」（『演劇学』25号、昭和59年3月）
○鈴木圭一氏「近世梅若物の展望」（『〈国文学論叢・新集八〉梅若縁起の研究と資料』慶應義塾大学国文学研究会編、昭和63年、桜楓社）など。

（2）後藤丹治氏「雨月物語「青頭巾」の一典拠」（『国語国文』17巻7号、昭和23年10月）。

（3）頴原退蔵氏『〈岩波講座日本文学〉日本文学書目解説（五）上方・江戸時代（上・下）』（昭和7・8年、岩波書店、『頴原退蔵著作集・第一巻』（昭和55年、中央公論社）に所収）・暉峻康隆氏『江戸文学辞典』（昭和15年、冨山房）「都鳥妻恋笛」の項・注（1）の志田氏の論等。

（4）『浮世草子の研究』（昭和44年、桜楓社、平成3年再刊）四五〇頁、及び『日本古典文学大辞典・第五巻』（昭和59年、岩波書店）「都鳥妻恋笛」の項。

（5）「八文字屋本時代物と怪異小説――『都鳥妻恋笛』の場合――」（『近世文芸』68号、平成10年6月）。但し、『金玉ねぢぶくさ』一の二については注（2）の後藤氏で既に指摘。

（6）『都鳥妻恋笛』の本文中の表記は「斑女」。だが他の隅田川物では「班女」が通例ゆえ、『都鳥妻恋笛』の本文の引用部を除き本稿では「班女」に統一して用いた。

（7）藤井隆氏編『〈未刊国文資料第三期・第十一冊〉未刊御伽草子集と研究（四）』（昭和42年、未刊国文資料刊行会）に翻刻あり。氏は解題で、室町時代末以降明暦以前に成立と推定されている。但し、写本の巻子本の形で現存する作品ゆえ、後世の作への影響力の強いのはやはり『角田川物語』の方である。

（8）注（1）の志田氏の論・鈴木宏昌氏「愛護・梅若伝承発生の母胎」（前出『梅若縁起の研究と資料』）など。

（9）木越氏が注（5）の論で指摘。

（10）歌舞伎においては元禄十四年の『出世隅田川』以降『都鳥妻恋笛』刊行の享保十九年に至るまで、ほぼ毎年隅田川物の演目が上演されており、それを田島由利氏が年表にまとめておられる（「隅田川物・清玄桜姫物・加賀見山物　上演作品の時代順一覧」『国立劇場上演資料集一三七・隅田川花御所染』昭和52年4月）。管見の範囲でも田島氏の上げた以外に

・正徳元年二の替り『班女親子二本柳』（江戸森田座）
・正徳三年秋　『すみだ川』（大坂三十郎座）※
・享保元年盆　『班女が扇』（京大和山座）※
・享保四年二の替り『すみだ川』（江戸森田座）※
・享保五年　『都鳥班女扇』（京沢村座）
・享保八年　『隅田川』（京榊山座）※

※正式の外題不明。

といった、『都鳥妻恋笛』に先行する演目を拾うことができる。隅田川物は地縁や梅若命日が三月十五日とされることから、特に江戸の春狂言として好まれた。上方では従来隅田川物は宝永六年・正徳二年・同四年の上演（いずれも演目は

『すみだ川』）が指摘されていたのみだが、実際には上方でもかなりの上演があったのではないかと推測される。

『都鳥妻恋笛』は、こうした元禄末から享保年間を通じての隅田川物狂言の流行を受けて企画された作であり、其磧は先行する絵入り狂言本や上方で実際に目にした演目から意欲的に取材したと思われる（詳しくは後述）。

（11）高橋則子氏が「説話と草双紙――松若の変貌――」（江本裕氏他編『〈講座日本の伝承文学第四巻〉散文文学〈説話〉の世界』平成8年、三弥井書店）で指摘。

（12）後藤氏が注（2）の論で指摘。

（13）後藤丹治氏「児物語の研究」（『仏教文化大講座1』昭和8年12月、補訂の上『中世国文学研究』（昭和18年、磯部甲陽堂）に収録）の指摘。

（14）『都鳥班女扇』は、従来指摘されていなかったが、上方の隅田川物狂言。国立国会図書館に絵入り狂言本が残る。年記を欠くものの、名代中村初大夫・座本沢村長十郎・その他出演役者より、享保五年上演と知れる。享保元年にも『班女が扇』（京大和山座）の上演があったことが分かる（享保二年刊の役者評判記『役者色茶湯』）が、正式の外題は不明で、仮に同じ外題だとしても内容が全く同じとは限らない。ただ、上方で元禄末から享保末にかけて活躍し座本も勤めた立役の沢村長十郎は、隅田川物を得意としたらしく、役者評判記『役者辰暦吾品定』（享保九年刊）大坂の部「沢村長十郎」の項には「当年も角田川のといや町が出ませふ」と見える。

（15）「『咲分五人媳』とその周辺」（『緑岡詞林』3号、昭和51年12月）。

（16）木越氏が注（5）の論で指摘。

（17）注（1）の白方氏の論や、近藤瑞男氏「人買い惣太の誕生――『双生隅田川』成立の一面――」（『立教大学日本文学』61号、昭和63年12月）など。

（18）江本裕氏『〈東洋文庫四七五〉伽婢子1』（昭和62年、平凡社）二五四頁。

（19）池の水面に梅若の姿が見えて入水、とする伝承もある。

（20）台本が残らず性格な筋立ては分からぬが、役者評判記『野傾髪透油』（享保二年刊）江戸の部「袖崎歌流」の項に次の如く見える。

二月廿三日より二の替銘剣隅田川に。松若丸のめのとみやぎのと成（中略）そのゝち安左衛門大西殿をだましわきざし取て切つけ。土手にてのしあいどふも〳〵。尾川殿にあふてのつめひらき。女武道の開山。此芸は去夏京大和山座で。はん女が扇の狂言にいたされたすぐさま。御手に入た芸（傍線稿者）

（21）平田澄子氏「『双生隅田川』について――江戸と近松――」（『文教大学国文』13号、昭和59年3月）。

（22）平出鏗二郎氏作成の「江戸時代敵討事蹟表」に「（年月日）享保八年三月廿七日・（場所）江戸浜田侯邸内・（討手の姓名）山路・（討手の身分）婢・（仇人の姓名）沢野・（仇人の身分）奥女中・（目的）主人のため・（原因の起りし時より敵討せしまでの年数）即日」と見える（『敵討』明治42年、文昌閣、平成2年に中央公論社より再刊）。

（23）横山邦治氏「『梅花流水』（天保十三年刊）について――八文字屋本『都鳥妻恋笛』流転の諸相――」（『近世文芸稿』11号、昭和42年1月）、「序にかえて――『都鳥妻恋笛』から『隅田川梅柳新書』へ――」と改題し『読本の研究――江戸

と上方と――』（昭和49年、風間書房）に所収。

（24）（25）木越氏の注（5）の論。

（26）篠原氏の注（15）の論。

（27）堂本正樹氏「隅田川遡源」（『古典劇との対立』昭和34年、能楽書林）。

（28）台本が伝わらず筋立てが不明だが、役者評判記『役者拳相撲』（享保十一年刊）京の部「市山助五郎」の項に次の記述が見える。

伊勢物語の中入。乞食のしこなし。大ぶんの当り。狂言は此段が大できと申評判お仕合。此仕組は四年以前榊山座に。姉川殿（姉川新四郎、稿者注）のつとめられし時。角田川にせられ。小四郎殿（榊山小四郎、稿者注）でかされし去年大小神祇組へ入られ。此所は大分はねました。

（29）平田氏の注（21）の論。

（30）高辻通室町の繁昌神社（別名班女神社）の班女塚は、女が死後鳥辺野に葬ろうとしても遺体が棺から出て家に舞い戻り、やむなくそのまま家に埋めた跡とされている。『宇治拾遺物語』三の十五に載せる長門前司の娘の奇談で、『雍州府志』（貞享三年刊）その他の地誌にも塚の由来が載る。ちなみに『宇治拾遺物語』には「この塚の傍近くは、下種（げす）などもえ居つかず。むつかしき事ありと言ひ伝へ」たとあり、『因果物語』（片仮名本）中の四（親不孝の女の死体が、罰として火葬でも焼けず水葬でも流れない話）等を参看しても、葬送を拒み屍を人目に晒すのは非常に忌むべきことと認識されたはずである。

（31）表章氏「百々裏話（18）」（『鎖仙』64号、昭和33年12月）。

（32）徳江元正氏「梅若譚」（『国学院雑誌』58号、昭和32年12月）・三村昌義氏「『隅田川』考――その背景と基盤――」（前出『梅若縁起の研究と資料』）など。

（33）『〈東洋文庫一二九〉改訂京都民俗志』（昭和43年、平凡社）34頁。

（34）「「班女」余響」（『国語と国文学』54巻7号、昭和52年7月）。

（35）高橋貞樹氏『特殊部落一千年史』（大正13年、更生閣、昭和43年に世界文庫より再刊）・原田伴彦氏『被差別部落の歴史』（昭和48年、朝日新聞社）・中尾健次氏『江戸時代の差別観念』（平成9年、三一書房）等。

（36）改題本の書肆については、石川俊一郎氏「近世梅若物の一考察――『都鳥妻恋笛』他二篇の書誌――」（前出『梅若縁起の研究と資料』）、及び『八文字屋全集・第12巻』（平成8年、汲古書院）の「『都鳥妻恋笛』解題」（稿者担当）を参照。

（37）注（23）に同じ。

（38）注（5）に同じ。

（39）柳田国男「笛吹き聟」（『昔話研究』2巻11号、昭和12年10月、『定本柳田国男集・第6巻』（昭和43年、筑摩書房）に所収）・中川聡氏「笛」の項（志村有弘・松本寧至氏編『日本奇談逸話伝説大事典』平成6年、勉誠社）など。

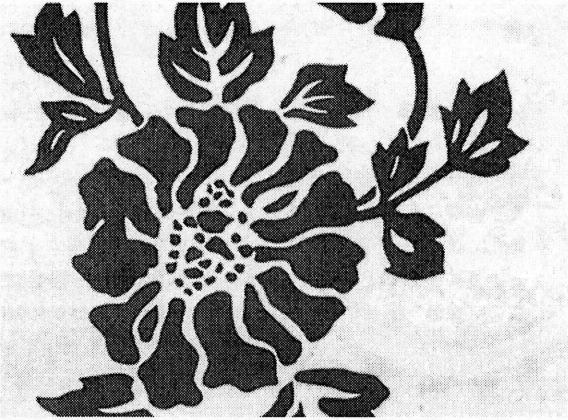
（40）『白鷺洲』は、宝暦四年から同十年にかけて島津久峯が木村探元（静隠）から聞き書きした写本。古く『芸苑叢書』に翻刻があり、当該箇所を篠原進氏が翻刻されている（『「白鷺洲」の其磧』『青山語文』17号、昭和62年3月）。本稿の引用は、篠原氏の翻刻を参看しつつ東京大学史料編纂所所蔵の一本（島津家文書、Ⅱ6・11）に拠り、句読点は私に付した。

（41）注（4）の長谷川氏「都鳥妻恋笛」の項（『日本古典文学

大辞典・第五巻』)。

(42) 注(3)の暉峻氏「都鳥妻恋笛」の項(『江戸文学辞典』)。

(43) 注(1)の鈴木氏の論。

〔付記〕本文の引用は、『都鳥妻恋笛』は『八文字屋本全集・第12巻』、『秋夜長物語』は『〈日本古典文学大系38〉御伽草子』(昭和33年、岩波書店)、『角田川物語』は『〈近世文芸叢書・第三〉小説』(明治43年、国書刊行会、昭和51年に第一書房より再版)、役者評判記は『歌舞伎評判記集成・第一期』(岩波書店)、『双生隅田川』は『〈新日本古典文学大系92〉近松浄瑠璃集下』(平成7年、岩波書店)に拠る。但し、原則としてルビは省き旧字体を新字体に改めた。

また本稿は、平成12年度文部省・日本学術振興会科学研究費補助金奨励研究(A)「江島其磧の気質物を中心とする浮世草子の研究、及び浮世草子と笑話の関係の研究」による成果の一部である。